

## 二十世紀日本思想史への構想

松本礼二著 『知識人の時代と丸山眞男』 を読んで

鷺 巢 力

はじめに

ただいま御紹介いただきました立命館大学の加藤周一現代思想研究センターの鷺巢と申します。よろしくお願い申し上げます。

最初にお断りしておかなければならないことがあります。私は研究者でも学者でもありません。したがって、松本さんの御著書に対する学術的な観点からの論評はできません。では、そういう人間がどうしてこの場に参加しているのかと申しますと、丸山眞男記念比較思想研究センターから、この公開研究会に出るよう言われたからです。

二〇一七年の十二月、今から三年前になりますが、東京女子大学の丸山眞男記念比較思想研究センターと立命館大学の加藤周一現代思想研究センターとのあいだで研究提携が結ばれました。それ以降、毎年、

共同企画展示などをやって参りましたが、おそらく提携をもつと拡げたいという意図があつて、私に「出ろ」と言われたんだと思います。さあ、これは断るわけには参りません、恥を忍んで受けることにいたしました。アマチュアとしての発言も大事だ、という考え方もありますから、私はここにアマチュアとして参加することにいたしました。

### 一、本書に触発されたこと

松本さんの御著書を拝読して、いくつか印象に残った点、あるいは考えさせられた点がありますので、そのお話をしたいと思います。

#### (1) 「周到に編集された論文集」

まず御著書は「周到に編集された論文集」だという印象を持ちまし

た。「編集」という作業は、普通、出版社の編集者が行うものだと考えられていますが、必ずしも編集者だけが行うものだと私は考えてなく、著者も編集に深く携わっていると考えています。編集というのは、いわば著者と編集者の共同作業です。その程度は、人によって、本によって、違います。松本さんの御著書の場合は、その程度が大きい。

御著書には全部で一〇の論文が収められています。一番早いものは一九九三年に発表された論文、そして一番新しいものが二〇一七年に発表された論文ですから、およそ二五年間にわたって執筆された論文が収められています。いずれも、一九八九年、東ヨーロッパの変動以降の論文であることが大事かと思えます。

「プロローグ」に「知識人の歴史としての二〇世紀思想史」という論文が置かれます。これは一九九四年に執筆されました。もともと早い一九九三年に発表された論文は、丸山さんの『忠誠と反逆』の書評ですから、それ以外の論文とは少し毛色が違います。そしてこの「プロローグ」は、この書評以外の論文のうちで、もっとも早くに書かれた論文です。

第Ⅰ部は「知識人の時代と日本」ということで五つの論文が収録されていますが、これらが書かれたのは一九九五年から二〇一〇年にかけてです。ただし、第五章は二〇一〇年に発表されているものの、実質は「書き下ろし」なのだ、ということ松本さん御自身がお書きになっています。これらの執筆と並行して、松本さんはトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』の翻訳を進めていました。『アメリカのデモ

クラシー』の刊行は、二〇〇五年、二〇〇八年です。

そのあとに「幕間の補論」が置かれます。ここには翻訳あるいは翻訳文化について、三つの論文があります。二〇一〇年から二〇一四年にかけて書かれています。『アメリカのデモクラシー』が刊行されたあとに書かれています。要するに、翻訳しながら考えた問題を論文として発表されたのでしょうか。

第Ⅱ部は「丸山眞男を読むために」と題されていて、さきほど申し上げたように、第九章は書評でいちばん早くて一九九三年の発表ですが、あとは二〇一四年から二〇一七年の間に書かれた三つの論文が収められている。

このように見てきますと、実に効率よくというか、一つの主題を研究するときにはそれに集中して、同じ主題について次々と積み重ねるように執筆されている。松本さんの研究および執筆の姿勢がよく出ていると思いました。無駄がないというか、脇道に逸れない。これも「周到に編集された」といったことの一つの意味です。

最初に戻って「知識人の歴史としての二〇世紀思想史」という「プロローグ」、これは、知識人の歴史としての二〇世紀思想史が書かれるべき時期に来ているのだという観点から、いくつかの国の二〇世紀思想史が書かれる。と同時に、それとの比較を通して二〇世紀日本思想史を位置づける。そして、本書に収録されている第一章から第九章までは、「プロローグ」に述べられた構想に沿って意識的に書かれている。統一感があつて、これは書き下ろしかと思うくらいに読めたところも

あります。それが「周到に編集された」と申し上げたもう一つの意味でして、おそらく松本さんは第一章以下をお書きになるときに、たえずこの「プロローグ」を意識しながらお書きになられたのではなからうかと推測しました。

第Ⅰ部に入りますと、非常に簡潔によくまとめられたフランス二〇世紀思想史とアメリカ二〇世紀思想史があつて、しかも、今日のわれわれの立ち位置を明らかにするためだろうと思ひますが、二一世紀まで射程を伸ばしてお書きになれる。これも「周到に編集された」ということのもう一つの意味です。

そのあとに「幕間の補論」がありまして「幕間」という表現がおもしろい。多くの人は「補論」とか、「補説」とか表現されるけれども、「幕間の補論」と名づける例は珍しいのではないか。私ははじめて見ました。松本さんがお芝居を好きなのは存じませんが、トクヴィルには演劇論があつたはずで、それに触発されて「幕間の補論」というタイトルをお付けになつたのではないかと思ひました。

「幕間」というのは芝居の前の幕と次の幕の間にある休憩時間です。その休憩時間の過ごし方というのは、だれしも、前の幕を反芻しながら、次の幕の期待に胸を膨らませると思ひます。したがつて、たんに「補う」という意味だけではなくて、前の章とも後ろの章とも「つながっている」という意識が「幕間の補論」という題にさせたのではないでしようか。

「幕間の補論」で取り上げられる「翻訳」の問題は、二〇世紀思想史

のみならず近代日本思想史全体のなかでも非常に大きな問題でしよう。具体的には松本さんは、トクヴィルの翻訳を進める過程のなかで考えられたことなどにも触れられています。

私も翻訳の問題は、学問の世界のことだけではなく、人びとの意識にも影響する問題だと思ひます。ほんの一例をあげるに過ぎませんが、〈right〉の訳語はいろいろあり「権理通義」という、権理の理は利益の「利」ではなくて理屈の「理」が使われていたこともあります。それが利益の「利」に変わつていく。そして今日では、おそらくほとんどすべての人々は「権利」という字によつて、「権利」は利益の根柢・源泉であると理解しているでしょう。「権理」という場合には、「理」の源泉という意味になるでしょうから、「権理」と「権利」では、人びとに与える表象は違つてきます。

〈society〉というのは、ヘボンの作つた『和英語林集成』というのは三版ありますよね。それで、初版と再版と三判で内容が少しずつ違つてますけれども、〈society〉は最初のところでは「社中」や「寄合」となつてゐるものが、三版では「社会」というふうになつてゐる。それは、具体的なものに即しているものから抽象的な表現になつていく、この時期の翻訳の一つの特徴みたいなものだと思います。今日言う「百科事典」も、西周の作つた「百学連環」という〈encyclopedia〉の訳語は、もろもろの学問がつながつて環を成している、という意味を感じさせます。ところが「百科事典」となると、「環を成している」という表象が薄れてしまふ。翻訳の問題は、思想・学問の問題にとど

まらず、暮らしの意識の問題にまでつながる、そういう問題を連想させられました。

「翻訳」以外にも「留学」とか「文体」とか、あるいは戦前の大学にあった「本科」と「選科」という問題が、近代日本の知識人のありように大きな影響を及ぼしているように私には思えました。「留学」とは、いったい何なのか。藤田省三さんは「留まって学ぶ」と「学ぶを留める」というのと二つあるのだと冗談と皮肉交じりに言っていました。だが、知識人にとって「留学」とはどういう意味をもつのか。一方、留学しない人がいるわけで、戦時下に研究者生活を始めた人たちは、丸山さんはじめほとんど留学していない、それ以前だと林達夫は留学していません。花田清輝も行っていない。では、その留学しなかった人は、西洋で培われた学問を学ぶ場合に、どのように学んでいったのか、というのは面白い問題だろうと思います。

それから「文体」の問題があり、文体とはその人の思想の表現だと思えますが、作家の文体論というのはかなりありますけれども、思想家の文体論というのはそれほどない。これらも、松本さんの御著書を読みながら、こういう問題にも掘げていったら面白いのではなからうか、と思った次第です。

もう一つは「本科」と「選科」という問題。これも松本さんの御著書で触れられているわけではありません。しかし「本科」と「選科」の区別はかなり微妙でして、現在の「学生」と「聴講生」ほどの違いはなかったようですが、「選科生」はけっこういて、両者にはいわく言

いがたい違いがあります。西田幾多郎は選科出身でコンプレックスがあったと自ら言っていますが、西田哲学のありように影響があったようにも思います。林達夫も選科出身で、かつ留学しなかったという事実は、林の言論のスタイルに強い影響を及ぼした、と私は思います。林の「翻訳」への強いこだわりとか、あるいは絶えず「反対派意見」を述べるといふ姿勢は「選科生」の自負のあらわれではなからうか。

第Ⅱ部は「丸山眞男を読むために」と題されていますが、「戦後啓蒙の世代」の知識人の代表として丸山眞男を取り上げるというのは、丸山眞男を取り上げれば二〇世紀思想史が書けるということではなくて、松本さんがいちばん親しんできた、あるいは尊敬している、あるいは関心が強い思想家として丸山眞男を取り上げたのだと思います。そのなかで、丸山さんが読者を意識して文章を書いていたことに、松本さんは触れています。私もそうだろうと同感します。

それとつながる問題ですが、本の体裁の問題があります。松本さんは、A5判でなくて四六判で刊行された。松本さんは御著書を一種の提案として刊行し、思想史の専門研究者だけを読者対象としたのではなく、隣接領域の人たち、あるいはもう少し広く一般の読者まで含めて、こういう問題について考えてほしいという意図をもっておられた。その意図が、四六判という判型を選ばせたのでしよう。しかも、ことは判型の問題だけにとどまらず、あとで述べるように松本さんの文章とも関係している。

## (2) 「挑発的論文集」

読んでいて印象深かったもう一つは、御著書ははなはだ挑発的な論文集だと感じたことです。「二〇世紀思想史」の提唱となっておりませんが、「二〇世紀思想史」は「近代思想史」ではなく、「二〇世紀日本思想史」も「近代日本思想史」ではない。国会図書館のサーチで「二〇世紀思想史」を検索すると、七件ぐらしかヒットしなくて、うち一件は松本さんの御著書です。「二〇世紀日本思想史」となると二件しかヒットしなく、成田龍一さんと吉見俊哉さんの共著『二〇世紀日本の思想』（作品社、二〇〇二年）と、津田雅夫さんの『昭和の思想』新論—二十世紀日本思想史の試み』（文理閣、二〇〇九年）だけです。

「二〇世紀思想史」と考えると、松本さんは御著書に触れておられますが、福沢も兆民も入らないわけですが、はたしてそれでいいのか、という疑問は生ずるのではないのでしょうか。ことに日本思想を考える場合に「二〇世紀日本思想史」でよいだろうか。

なぜ松本さんは「二〇世紀思想史」という主題を設定したのか。「知識人の歴史としての二〇世紀思想史」というのが、松本さんの基本的な問題意識です。二〇世紀前半から中期までの知識人の役割は大いに期待されていて、知識人の言動も非常に積極的だった。二〇世紀中期以降は知識人の地盤沈下がはじまって、「知識人の時代は終わった」のだと唱えられるようになった。かつ二〇世紀後半から「反知性主義」の風潮が強まっていく。

しかも、松本さんが親しんでいるフランス思想は、二〇世紀が始ま

る前後に起きた「ドレフュス事件」を契機にして、大きな転機を迎える。したがって、近代思想史というより二〇世紀思想史という捉え方により親しんでいる。そういうことがあって「二〇世紀思想史」と設定する必然性があったのだろうかと思いました。

ただ、それだけではなく、「反知性主義」や「知識人の時代はおわった」という主張に抗するために、いわば一種「知識人の擁護」という逆説的な主張のために「知識人の歴史としての二〇世紀思想史」という問題を立てることもできる、あるいはそのように私は読みたい。

## (3) 分かりやすい文章

もう一つ感じたのは、丸山さんが「読者を意識していた」と書く松本さんは、読者を意識していないはずはないし、実際、読者を意識した文章になっていると思います。

松本さんの文章は、一文が比較的短いです。第一章の五、六ページを読んだだけでも、ずいぶん文章が短いなと感じました。「冷戦が実際に終結する以前に、冷戦期、さらには広く二〇世紀のイデオロギー対決の主役を担った知識人の多くは実質上舞台から姿を消していた。そして、彼らのイデオロギーを継承しようとする意志はともかく、彼らに代わる存在は次の世代に見当らない」というように、一文が四〇字から六〇字くらいになっている。八〇字はなかなか超えない。短い文章であるということは、分かりやすさという点で重要な条件であって、分かりやすく書きたいという意識が、松本さんに文章を短くさせたのだ

ろうと思います。

「學術用語の羅列も行わずに——もちろん、學術用語が使われないわけではないですが——、世間で流布しているような言葉も使っている。「シンプルライフ」だとか「ガラパゴス化」だとかいうような、いま流布しているような言葉というのは、読者の関心を引き寄せるための方法なのではないでしょうか。

論理の展開も、複雑で追うことができないということはない。意識的に分かりやすい論理の展開を実践していたのだと思います。

#### (4) 目配りの良さ、複眼的思考、逆説の好尚

目配りの良さとか、複眼的思考とか、逆説の好尚があり、フランス思想史やアメリカ思想史の件なども、いちいち申し上げるまでもないですが、非常に目配りが良い。そして、一つの事柄に複数の側面を見るところというものの見方は、丸山さんやトクヴィルにも共通するのですが、松本さんの文章も一つの事柄に複数の側面を見えています。

二五ページには「成り上がり知識人」と「大衆コンプレックス」というのが背中合わせにくっついているという。そして「デモクラシーの平準化」が「狭い個人主義」の蔓延になって、それが国家権力の肥大につながっていくのだ、というような奥行きのある表現が見られます。

逆説の好尚は、三二ページに二つ出てきます。松本さんは逆説的な表現が好きなのかと思いました。

「よく言われることだが、この点で逆説的なのは、戦前に自己の学問

の基礎を築いた最後の世代である「戦後啓蒙」の世代は、戦争のために本来留学すべき時期にその機会を奪われた世代だという事実である。(日本の高等教育をパスしてアメリカの大学に学び、戦争のために送り返された都留重人や鶴見俊輔はこの点例外だが、彼らの留学はここでいう定型と異なる。戦後思想史に独自の位置を占め、本章にいう「日本における知識人の時代」の最後を飾ると同時にその幕を引く役割を担った雑誌『思想の科学』の発足時の同人が、その種のアメリカ帰りと、同世代だが日本のアカデミズムに育って留学の機会を奪われた人々とで構成されていた事実は象徴的である。)」

以上のように述べていて、さらに「それ以上に逆説的なのは」と、「逆説的な」という表現が二つ重ねられている。

「それにもかかわらず、この世代の知識人こそ、近代ヨーロッパの思想と学問を深く理解し、これを方法的に鍛えあげ、日本社会の学問的分析に独創的な形で生かしたという事実である。むしろこの世代の学者の仕事が例外なくすぐれ、それ以前のものには無価値だというわけではない。学問的業績の価値は結局は学者個人、個々の作品に即して測るべきものである。にもかかわらず、ヨーロッパから学んだ歴史や社会科学の方法が真に根つき、日本の現実それ自体を分析する道具として定着したのは、公平にみてこの世代の学者の戦中の蓄積を通じてのことであった。大塚久雄や丸山眞男の業績に代表される戦時下の蓄積こそ戦後知識人に共通の思考枠組を提供したのである」

とお書きになっていて、逆説的な関係が重ねられて述べられている。

ほかにもたくさん出てきますが、こういうところに興味を感じていることが伝わってきます。

## 二、壮大な構想の展望

### (1) 二〇世紀比較思想史、二〇世紀日本思想史の構想

松本さんは「二〇世紀比較思想史」とか「二〇世紀日本思想史」の構想をもっているわけですが、知識人とはいったい何なのかということとが当然問題になります。知識人とは何かということについては、多くの考えが出されているわけで、知識人イコール学者研究者ではないし、言語を駆使して自己表現したり、あるいは言論活動をした人だと考えれば、松本さんの問題意識に沿ったとしても、作家とか芸術家とかジャーナリストの活動を除外することはできないだろう、と私は思います。やはり花田清輝とか、あるいは武満徹とか清沢冽とか花森安治といった人たちを入れたほうが、思想史としては豊かになるのではないのでしょうか。

もう一つは思想とは何かという問題が出てくるわけで、『思想』に載る論文だけが思想であるわけではなくて、「文学」もまた思想であって、津田左右吉の『文学に現れたる我が国民思想の研究』は江戸時代までしか書かれていないけれども、滑稽本や人情本、あるいは浮世絵や常盤津までが議論の俎上にのぼってくる。そこまでも思想に含めたほうが思想史としてはおもしろくなるのではなからうか。生活習慣や風俗

も「思想」といいうる、そこまで「思想」として含める考え方もあるわけですから。

### (2) 松本構想には共同研究が必要

松本さんの御著書の書名は『知識人の時代と丸山眞男』ですが、この「丸山眞男」のところには丸山眞男以外の名前がいろいろ入る可能性があります。また、どんな有能な研究者が行っても、松本さんが構想している「二〇世紀思想史」を一人で完成させることは難しい。多岐にわたる問題が想定され、しかも、それぞれの領域は高度の専門化が進んでいるからです。したがって、どうしても共同研究が必要になるだろう。

思想史関係の共同研究で代表的なのは、京都大学の人文科学研究所で行った『ルソー研究』（岩波書店、一九五一年）とか『フランス百科全書の研究』（岩波書店、一九五四年）とか『フランス革命の研究』（岩波書店、一九五九年）で、これは桑原武夫さんの組織力に負っているところが大きい。思想の科学研究会が行った『共同研究 転向』（全三冊、平凡社、一九五九—一九六〇年）、これは鶴見俊輔さんの指導力に負っている。これらの共同研究以上の規模の共同研究を松本さんはお考えになっているのではなからうか。おそらく現在の学問の世界で言えば、こういうことを中心になって行いうるのは丸山眞男記念比較思想研究センターにおいて、ほかにはないだろうと思います。

拙い報告にすぎませんが、私の報告を終わりにします。